

The Outline of the Agricultural Production in Republic China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34371

中華民国前期中国における農産物生産の概要

弁 納 才 一

はじめに

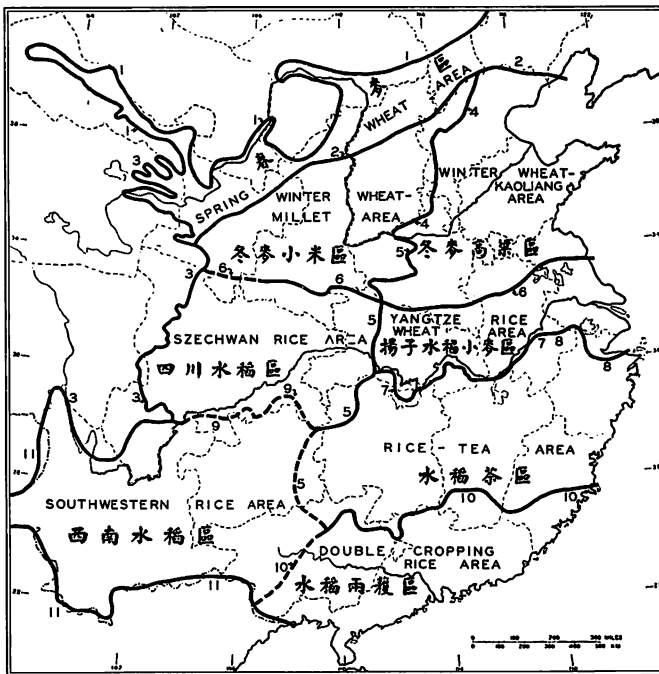
筆者は、これまで中華民国期中国における食糧事情(食糧穀物の生産・流通・消費にかかわる総合的状況)について、農村経済構造の特質(すなわち、商品経済の展開とそれに基づく地域間分業体制の構築が農村経済の発展を支えてきたということ)とのかかわりを意識しながら論じてきた¹⁾。そして、中国農村経済の発展に伴って米や小麦などの穀物までもが販売することを目的として生産されるようになっていた(すなわち、穀物が商品作物化していた)ことを明らかにした。

そもそも、農産物には、主要な食糧となる穀物・イモ類や副食品となる蔬菜・根菜類・豆類など、あるいは、果樹類などの他にも、商品作物とされる棉花・麻・桑・茶・葉煙草などもあるが、中華民国期中国においても全国的には穀物類の生産がその大部分を占めていた。また、中国の穀倉地帯は長江流域(華中)であり、そこは主要な水稻作地として知られているが²⁾、実際には、意外にも華中は小麦作地としても極めて重要な地位を占めていた(詳細は後述)。

中華民国期中国における農産物の生産状況、あるいは、農業の実態について総合的に論じようとする際に、ほとんど必ずと言ってよいほど参照されてきた文献資料ないし統計資料が³⁾、Buck John Lossing(ジョン・ロッシング・バック)の“Land Utilization in China”(『中国の土地利用』)である。すなわち、ロッシング・バックは、同上書において、1930年代前半における中国の農耕地帯を北部の小麦作地帯と南部の水稻作地帯とに二分する「区画線は東部海岸より起点し北進して江都の阜寧、淮陰を過ぎ、洪沢湖の北を通って西南に屈し

大体に於て淮河の兩岸に添うて走り、この間時々北岸に及ぶ部分もあるが信陽の北を過ぎて河南省と湖北省の境に至る」と大別した上で、さらに、その北部の小麦作地帯を春麦区・冬麦「小米」(粟)区・冬麦高粱区に細分化し、また、その南部の水稲作地帯を四川水稻区・「揚子」(長江中下流域)水稻小麦区・西南水稻区・水稻茶区・水稻「兩獲」(二期作)区に細分化している²⁾(図1を参照)。

以上のことから、淮河(淮水)を境として、その以北は小麦作地だったのに対して、その以南は水稻作地だったと認識されるようになってきた。ただし、上掲書は地理的ないし気候的な条件から中国各地域の農耕地が主要にはどのように利用されているのか(すなわち、いかなる農作物が作付されているのか)を明らかにしようとしたものであり、食糧事情(食糧穀物の流動・流通・消費にかかわる総合的状況)について論じたものではない。



典拠) ロッシング・バック編(岩田孝三訳)『支那土地利用地図集成』(東学社, 1938年)22頁「第九図 支那の農業区」。

図1. 1930年代前半における中国の農業区

よって、本稿では、主に中華民国前期(1912～37年)のうち、相対的に統計資料が整っている1914～37年における主要な食糧作物であるうるち米・小麦・玉蜀黍・燕麦・高粱・粟・甘薯について、その生産の動向を概観したい。そして、合わせて、商品化率が比較的高かった米と小麦の中華民国前期中国国内における流動・流通の状況についても若干言及しておきたい。というのは、米と小麦の流動・流通の状況は、それらの生産状況と消費状況を反映しているからである。

なお、本稿では、主に煩雑さを避けるために、資料からの引用部分を含めて原則として常用漢字と算用数字を用いることにした。

I 主要農産物の総生産

まず最初に、ここで利用する統計資料(『中国近代農業生産及貿易統計資料』)の問題点と限界性について説明しておきたい。すなわち、この統計資料が依拠している原典は、1914～16年については農商部総務庁統計科編『農商統計表』、1918年については『第1回中国年鑑』商務印書館発行、1924～29年については国民政府主計処統計局『統計月報』であるが、これらの統計数値は中国全域を掌握し得ていない上に、その数値の不備と不正確さが目立つ。これは、北京政府時期(1913～28年)の中国が内戦・分裂状態にあったためである。一方、実業部中央農業実験所農業経済科編『農情報告』に基づく1931～37年の統計資料の数値については、相対的に精度が高いとは言えるが、例えば、1931～34年の江西省については17県のデータが欠落しているとされている(第一次国共内戦において江西省が主戦場になったためであろう)など、いくつかの問題を含んでいることも否定しえない。

なお、1915～18年の四川省・雲南省、1918年の湖南省、1918年以前の寧夏省・綏遠省、1916年・1918年の広東省・貴州省、1918～37年の広西省、1924～29年の広東省、1918年以前の寧夏省・綏遠省、1934年以前の青海省、満州事変(9・18事変)が勃発した1931年以降の東北各省(黒竜江省・吉林省・遼寧省・熱河省)と新疆省・チャハル省の統計数値が欠落している。ただし、1931～37年の統計数値については、他の資料による推計から修正が試みられ

ているが³⁾、それらの統計資料にも不備があり、精確さを欠いていることが指摘されている⁴⁾。

よって、以上のような統計数値にかかわる事情を考慮すれば、これらの統計資料によって看取しうるのは、あくまでも傾向性であるということを確認しておく必要がある。この点が、本稿のタイトルに「概観」と付した所以である。

(1) 総栽培面積

表1-1を見てみると、1914～37年のうち、1914～16年の粟と1914～18年の甘薯に関するデータが欠落しており、単純に比較することが困難であるが、主要な農作物別の総栽培面積では、小麦が最も広く、これにその8割余にあたるうるち米がつぎ、また、これにうるち米の約3分の1ないし約4分の1にあたる玉蜀黍・高粱・粟などの雑穀類がつぎ、さらに、これにつぐ甘薯がその雑穀類の半分以下となっており、総栽培面積が最も少なかった燕麦は甘薯の半分程度となっていた。しかも、以上の主要な農作物の栽培面積については、統計数値の精度が相対的に高いと考えられる1930年代に限定して見ても、それぞれの農作物の総栽培面積についてはそれほど明確な増減傾向を見出すことはできない。

(2) 総生産量

表1-2を見てみると、1914～37年のうち、やはり1914～16年の粟と1914～18年の甘薯に関するデータが欠落しており、単純に比較することが困難であるが、主要な農作物別の総生産量では、うるち米が最も多く、これにその半分程度にあたる小麦と甘薯がつぎ、また、これにその約3分の1にあたる高粱・玉蜀黍・粟などの雑穀がつぎ、さらに、生産量が最も少なかった燕麦は高粱などの雑穀の1割余りにしかすぎなかった。しかも、以上の主要な農作物の生産量については、統計数値の精度が相対的に高いと考えられる1930年代に限定して見ても、それぞれそれほど明確な増減傾向を見出すことはできない。

中華民国前期中国における農産物生産の概要 (弁納)

表 1-1. 主要農作物別総栽培面積 (単位: 万市畝)

年度	うるち米	小麦	玉蜀黍	燕麦	高粱	粟	甘薯
1914	49,033 (26,111)	25,471 (17,764)	4,769	2,950	11,105	—	—
1915	22,132	24,517 (16,709)	4,009 (4,044)	1,731	10,000	—	—
1916	13,615 (15,721)	48,684 (16,629)	4,278 (4,328)	2,597 (2,611)	9,825 (9,869)	—	—
1918	13,301	48,938 (19,026)	5,363 (5,486)	2,579 (2,630)	22,050 (11,145)	16,488 (16,585)	—
1924~29	26,144	31,365	8,485	2,169	14,068	13,839	2,451
1931	24,375	29,228	6,845	—	7,789	7,691	2,928
1932	24,620	30,398	7,191	—	7,733	7,827	3,093
1933	25,024	29,045	6,424	1,211	7,363	7,955	3,476
1934	23,576	29,074	6,267	1,380	7,433	7,829	3,235
1935	25,064	30,995	7,035	1,429	6,766	7,613	3,318
1936	24,524	30,371	6,951	1,364	6,988	7,359	3,550
1937	23,557	27,111	7,113	1,258	7,231	7,617	3,753

典拠) 許道夫編『中国近代農業生産及貿易統計資料』(上海人民出版社, 1983年) 12~88頁より作成。ただし, 表中の「—」はデータが欠落していることを示しており, また, カッコ内はデータの不備・誤記の疑いのあるものについて平年の数値を参考にして修正した数値である(以下, 同様)。なお, 各農作物のうち, データが欠落していたのは, うるち米では1914~18年の黒竜江省, 小麦では1915年の山西省, 玉蜀黍では1916年のチャハル省, 1918年の湖南省・広西省・チャハル省, 1924~32年の福建省, 燕麦では1915年の山西省・山東省, 1916年の山東省, 1924~29年の江蘇省・浙江省・安徽省・湖北省・福建省, 1933~37年の浙江省・湖南省・江西省・福建省・広東省・雲南省・貴州省, 粟では1918年の福建省・広東省である。

表 1-2. 主要農作物別総生産量 (単位: 万市担)

年度	うるち米	小麦	玉蜀黍	燕麦	高粱	粟	甘薯
1914	231,481 (83,556)	39,878 (25,307)	6,765 (6,699)	3,173 (3,226)	17,342	—	—
1915	204,524 (66,711)	17,207	5,665 (4,585)	3,257	15,477 (15,437)	—	—
1916	35,566 (51,716)	53,666 (23,670)	5,935	2,256 (2,425)	14,742 (14,580)	—	—
1918	28,277 (28,781)	57,571 (24,857)	8,873 (9,092)	2,209 (3,682)	42,620 (16,805)	27,373 (27,462)	—
1924~29	103,779	50,779	17,639	2,720	27,889	25,929	31,749
1931	81,748	42,850	12,774	—	12,819	12,485	31,653
1932	94,043	45,114	13,949	—	14,393	12,812	36,069
1933	87,901	44,912	11,453	1,316	13,373	12,874	36,804
1934	69,685	44,680	11,062	1,654	12,719	13,169	32,063
1935	87,053	42,379	13,658	1,483	13,006	12,851	37,155
1936	87,066	55,917	12,208	1,517	14,662	13,071	30,208
1937	83,817	31,969	12,722	1,323	13,271	11,401	42,189

典拠) 表 1-1 に同じ。なお, 表 1-1 で示した以外に, 各農作物のうち, データが欠落しているのは, うるち米では1931~32年の山西省・山東省・甘粛省・寧夏省, 1933年の寧夏省, 玉蜀黍では1914~15年のチャハル省, 1918年の遼寧省, 粟では1931年の江蘇省である。

(3) 単位面積当たりの生産量

表1-3を見てみると、1914~37年における主要な農作物の単位面積当たりの生産量についても、やはり1914~16年の粟と1914~18年の甘薯に関するデータが欠落していることをはじめとする統計数値の不備や不正確さを考慮すると、あるいは、統計数値の精度が相対的に高いと考えられる1930年代に限定して見てみても、それぞれそれほど明確な増減傾向を見出すことはできない。

このことから、中華民国前期中国における農業経済の発展がほとんど見られなかったという従来の評価は、ひとまず成り立つようにも思われる。だが、それは、あくまで農業経済(農業生産量)のみからする評価にすぎないのであって、農村経済全体からの質的ないし構造的な分析は欠落しており、農業経済を含む農村経済全体に対する分析にはなっていない。

表1-3. 主要農作物別の1市畝当たり生産量 (単位: 市担)

年度	うるち米	小麦	玉蜀黍	燕麦	高粱	粟	甘薯
1914	3.2	1.4	1.4	1.0	1.5	—	—
1915	3.0	1.0	1.1	1.8	1.5	—	—
1916	3.2	1.4	1.3	0.9	1.4	—	—
1918	2.1	1.3	1.6	1.4	1.5	1.6	—
1924~29	3.9	1.6	2.0	1.2	1.9	1.6	12.9
1931	3.3	1.4	1.8	—	1.6	1.8	10.8
1932	3.8	1.4	1.9	—	1.8	1.6	11.6
1933	3.5	1.5	1.7	1.0	1.8	1.6	10.5
1934	2.9	1.5	1.7	1.1	1.7	1.6	9.9
1935	3.4	1.3	1.9	1.0	1.9	1.6	11.1
1936	3.5	1.8	1.7	1.1	2.0	1.7	8.5
1937	3.5	1.1	1.7	1.0	1.8	1.4	11.2

典拠) 表1-1及び表1-2(修正値があるものについてはそれを利用した)より作成。なお、小数点2位以下を切り捨てた。

また、同じく表1-3から農作物別に単位面積当たりの生産量を比較してみると、甘薯が最も多く、これにその約3分の1にあたるうるち米がつぎ、さらに、甘薯の5分の1以下の高粱・玉蜀黍と甘薯の7分の1程度の粟・小麦がつぎ、最下位の燕麦は甘薯の約10分の1にしかすぎなかった。このよう

に、甘薯の単位面積当たりの生産量が際立って高かったのに対して、小麦や雑穀類のそれが相対的に極めて低かったことがわかる。

II 主要農産物別の生産

(1) 米

中華民国初期の中国における米の生産動向について知ることができる『支那ノ米需給状況』(1915年)によれば、中国の米産地としてまず華中の江蘇・浙江・安徽・江西・湖北・湖南・四川の7省が挙げられており、これに華南の福建・広東・広西の3省がつぎ、また、「余剰米多キハ安徽省ヲ最トシ湖南、江蘇、江西之二次」いでいたという⁵⁾。そして、特に華中の東部と中部に位置する江蘇・浙江・安徽・江西の4省における米の生産量だけでも全国の約4割を占めていた⁶⁾。

まず、表2-1を見てみると、1914~37年においてうるち米の栽培面積が最も広がったのは、二期作が行われていた広東省であり、これに四川省がつぎ、さらに、湖南・湖北・江西・江蘇・浙江の5省が続き、このうち、かつて水稻から棉花や桑への転作が起こった江蘇・浙江の2省では1930年代になって水稻作への再転換が進行したこともあって、うるち米の栽培面積は拡大する傾向にあった⁷⁾。

また、表2-2を見てみると、1914~37年においてうるち米の生産量が最も多かったのは、常に食用米が不足していた広東省であり、これにほぼ同水準の四川省がついでいた。そして、四川・湖南・湖北・江西の4省におけるうるち米の年間生産量は安徽・浙江・江蘇の3省よりも多かったが、前者の4省が減少傾向にあったのに対して、後者の3省は2倍強から4倍弱ほど増加している。こうして、1930年代には長江下流域の江蘇省と浙江省におけるうるち米の生産量は長江中流域の湖南省・湖北省・江西省とほぼ同程度になっていた。

さらに、表2-3を見てみると、1市畝当たりの生産量では、四川省や湖南省がその他の省よりも相対的に高くなっており、これに江蘇省がついでいる。また、各省とも概ね1930年代には1920年代に比して1市畝当たりの生産

量は増加しているが、特に安徽・江蘇・浙江の3省は2倍強ないし3倍強ほど増加している。このことが、すでに表2-2で見たように、江蘇省と浙江省におけるうるち米の生産量が増加した主要な理由になっていたと考えられる。

表2-1. 主要各省におけるうるち米の栽培面積の動向 (単位: 万市畝)

年度	華中							華南		西南		
	四川省	湖南省	湖北省	江西省	安徽省	浙江省	江蘇省	福建省	広東省	広西省	雲南省	貴州省
1914	9,351?	19,522?	5,987	2,833	1,113	1,773	1,827	765	2,911	617	504	293
1915	—	4,305	2,447	2,865	1,500	1,793	1,894	768	3,760	1,195	—	293
1916	—	393※	3,003	2,917	1,531	1,836	1,944	777	—	1,211	—	—
1918	—	—	2,483※	2,920	1,541	1,850	2,311	774	—	—	—	—
1924~29	3,827	2,283	2,059	2,642	1,911	2,165	2,389	1,372	4,545	—	1,040	841
1931	4,000	2,430	2,549	1,698	1,475	2,355	1,805	1,043	4,700	—	1,144	754
1932	4,078	2,481	2,637	1,708	1,371	2,365	1,877	1,000	4,724	—	1,155	798
1933	3,884	2,585	2,216	2,046	1,490	2,332	2,407	1,076	4,677	—	1,060	788
1934	3,929	2,516	2,277	1,687	1,453	2,315	2,221	1,177	5,000	—	974	720
1935	3,834	2,509	2,232	2,076	1,569	2,376	2,455	1,217	4,639	—	951	773
1936	3,599	2,470	2,142	2,301	1,507	2,312	2,584	1,239	4,186	—	944	712
1937	2,767	2,549	2,109	2,268	1,540	2,312	2,526	1,302	4,106	—	893	664

典拠) 表1-1に同じ。なお、表中の「?」は数値に疑問があることを、また、「※」は統計が不備であることを示している(以下、同様)。

表2-2. 主要各省におけるうるち米の生産量の動向 (単位: 万市担)

年度	華中							華南		西南		
	四川省	湖南省	湖北省	江西省	安徽省	浙江省	江蘇省	福建省	広東省	広西省	雲南省	貴州省
1914	9,541?	22,053?	12,436	8,458	1,352	3,231	2,695	2,130	165,923?	1,199	807	712
1915	—	18,942	4,638	8,789	5,241	3,586	2,921	2,077	153,125?	3,631	—	748
1916	—	1,794※	5,960	8,595	2,786	4,886	3,074	2,109	—	4,986	—	—
1918	—	—	5,496※	8,553	2,996	3,956	3,825	2,151	—	—	—	—
1924~29	15,809	12,134	9,143	9,990	7,023	8,593	8,588	5,347	16,899	—	3,800	3,771
1931	16,043	8,505	6,755	5,877	4,235	7,868	5,181	4,028	16,265	—	3,629	2,414
1932	18,353	11,391	8,889	6,237	4,567	9,081	7,886	3,712	16,819	—	3,963	2,306
1933	15,343	9,435	7,669	7,183	4,889	7,557	9,364	3,572	16,184	—	3,265	2,350
1934	14,655	6,568	4,919	2,952	2,267	4,770	6,376	4,310	16,851	—	3,175	1,765
1935	15,612	10,223	6,312	7,294	3,224	8,470	9,441	4,547	15,963	—	2,950	2,212
1936	11,940	11,430	7,190	8,447	5,500	8,723	10,612	4,624	12,337	—	3,097	1,899
1937	7,866	10,507	7,350	7,700	5,507	8,203	10,069	5,249	15,300	—	2,470	2,148

典拠) 表1-1に同じ。

ところで、四川省を除く華中各省における1931年の大幅な減少は長江の氾濫による大水害の影響であると考えられるが、それよりもさらに一層大幅に減少した1934年には華中で大干害が発生しており、その被害の激しさを窺い知ることが⁸⁾できる。また、全体として1930年代にはそれ以前よりもうち

米の生産量は増加する傾向にあったが³、江西省で1930年代前半に米の生産量がやや低かったのは国共両党軍が激突した第一次国共内戦の主要な舞台となったことが大きく影響したと考えられる⁹⁾。このように、平時と見なした民国前期にも大規模な災害や内戦などによって農業生産が非常に大きな打撃を受けていたことがわかる。

以上、うち米については、華中と華南が中心のかつ主要な生産地となっていたにもかかわらず、広東省をはじめとする華南や華中東部の江蘇・浙江の2省は大量の食用米を移入していた。

表2-3. 主要各省におけるうち米の1市畝当たり生産量の動向 (単位: 市斤)

年度	華中							華南			西南	
	四川省	湖南省	湖北省	江西省	安徽省	浙江省	江蘇省	福建省	広東省	広西省	雲南省	貴州省
1914	94?	104?	192	275	112	168	136	257	—	179	147	224
1915	—	408	175	283	361	184	142	249	375	—	—	235
1916	—	420※	183	269	168	245	146	250	—	379	—	—
1918	—	—	204※	270	179	197	153	256	—	—	—	—
1924~29	413	530	444	378	367	397	360	390	372	—	365	448
1931	401	350	265	346	287	334	287	386	346	—	317	320
1932	450	459	337	365	333	384	420	371	356	—	343	289
1933	395	365	346	351	328	324	389	332	346	—	308	298
1934	373	261	216	175	156	206	287	366	337	—	326	245
1935	407	407	283	351	205	357	384	374	344	—	310	286
1936	332	463	336	367	322	377	411	373	295	—	328	267
1937	284	412	348	339	357	355	399	403	373	—	276	324

典拠) 表1-1に同じ。

(2) 小麦

華中が米の主要な生産地だったのに対して、小麦の主要な生産地は華北であるとイメージが強いが、実態はやや異なっている。

まず、表3-1を見てみると、1914~37年において小麦の栽培面積が最も広がったのは河南省であり、また、これに山東省と河北省がついでいたが、さらに、これにつぐ河北省とほぼ同水準にあった江蘇省は、山西省や陝西省の約2倍だった。しかも、安徽省も山西省より広く、また、四川省と湖北省は山西省をやや下回るものの、陝西省を上回っていた。このことから、華中で稲作の裏作として冬小麦が広く栽培されていたことを窺い知ることができる。

表3-1. 主要各省における小麦の栽培面積の動向 (単位: 万市畝)

年度	華北				華中				西北		
	河北省	山東省	山西省	河南省	四川省	湖北省	安徽省	浙江省	江蘇省	陝西省	甘肅省
1914	1,740	3,891	1,261	857	9,307?	945	719	340	1,796	1,434	788
1915	1,846	3,161	—	857	—	962	777	372	1,756	1,542	1,402
1916	1,893	4,386	1,345	17,301?	—	1,840	838	369	1,781	1,542	1,240
1918	1,753	3,334	1,185	36,402?	—	1,632	910	359	2,229	1,368	1,265
1924~29	2,888	4,581	1,521	7,419	1,699	1,728	1,963	829	3,884	1,367	798
1931	3,205	5,167	1,712	8,177	1,531	1,453	2,091	819	3,371	1,091	629
1932	3,693	5,418	1,775	8,814	1,516	1,450	1,992	791	3,465	1,154	692
1933	3,484	5,017	1,769	9,672	1,486	1,453	1,973	694	3,150	1,268	623
1934	3,339	5,285	1,752	8,109	1,406	1,472	1,879	706	3,263	1,392	664
1935	3,722	5,448	1,799	7,898	1,532	1,539	2,018	785	3,415	1,488	726
1936	2,973	5,173	1,839	10,541	1,622	1,707	1,982	748	3,210	1,459	741
1937	2,130	4,339	1,598	3,744	1,782	1,512	1,856	745	3,224	1,365	824

典拠) 表1-1に同じ。

表3-2. 主要各省における小麦の生産量の動向 (単位: 万市担)

年度	華北				華中				西北		
	河北省	山東省	山西省	河南省	四川省	湖北省	安徽省	浙江省	江蘇省	陝西省	甘肅省
1914	1,252	7,787	1,511	417	18,170?	1,968	1,029	553	2,092	1,306	723
1915	1,174	4,605	—	418	—	2,040	637	534	2,947	1,455	619
1916	1,342	2,422	3,657	29,555?	—	3,823	1,086	1,281	2,329	1,129	746
1918	1,398	312?	1,157	36,718?	—	2,876	888	633	3,038	1,780	796
1924~29	3,656	7,293	2,061	7,419	3,158	3,426	3,170	1,401	6,626	2,238	1,489
1931	3,846	7,699	1,318	8,177	3,628	2,630	2,844	1,212	6,506	1,189	617
1932	4,210	7,965	1,668	8,814	4,033	2,741	2,770	1,218	6,446	854	574
1933	4,912	7,576	1,839	9,672	3,612	2,775	2,920	978	5,608	1,091	579
1934	3,873	7,347	2,102	8,109	3,700	2,356	3,213	1,010	6,135	2,353	976
1935	3,776	6,729	1,726	7,898	3,706	2,480	2,681	884	5,743	2,412	891
1936	3,065	7,102	1,915	10,541	3,839	3,012	3,372	995	5,475	1,775	788
1937	1,877	5,773	1,283	3,744	2,860	2,122	2,011	1,146	5,360	942	832

典拠) 表1-1に同じ。

また、表3-2を見てみると、1914~37年において小麦の生産量が最も多かったのは河南省であり、これに山東省がついでいたが、さらにこれにつぐのが江蘇省で、1920~30年代には増加傾向にあり、河北省の2倍近く、また、山西省の約3~4倍となっていた。しかも、四川・湖北・安徽の3省も山西省や陝西省を上回っていた。いずれにせよ、華北の中でも山西省における小麦生産量の少なさは際立っていた。このように、華中諸省における小麦の生産量は華北と肩を並べるほどだった。

さらに、表3-3を見てみると、1914~37年において1市畝当たりの生産

量が最も多かったのは四川省であり、これに湖北省と江蘇省がつぎ、華北の中では山東省と河南省が河北省や山西省より多かった。

表3-3. 主要各省における小麦の1市畝当たりの生産量の動向 (単位: 市斤)

年度	華北				華中					西北	
	河北省	山東省	山西省	河南省	四川省	湖北省	安徽省	浙江省	江蘇省	陝西省	甘肅省
1914	72	184	110	45	180	192	132	150	136	75	81
1915	64	134	—	45	—	195	76	132	155	87	41
1916	71	51	251	158	—	192	119	319	121	68	55
1918	80	53	90	93	—	162	90	163	126	120	58
1924~29	127	159	135	135	186	198	161	170	171	164	187
1931	120	149	77	137	237	181	136	148	193	109	98
1932	114	147	94	137	266	189	139	154	186	74	83
1933	141	151	104	164	243	191	148	141	178	86	93
1934	116	139	120	142	263	160	171	143	188	169	147
1935	101	124	96	135	242	161	133	113	168	162	123
1936	103	137	104	172	237	176	170	133	171	122	106
1937	88	133	80	76	161	140	108	154	166	60	101

典拠) 表1-1に同じ。

以上のことから、小麦については、栽培面積では山西省を除く華北3省が他地域を凌駕しているが、生産量では華中が華北と肩を並べるか、あるいは、それを凌駕しており、主要な米産地だった華中は華北とともに主要な小麦生産地でもあった。そして、華北の中で河南省は小麦の栽培面積では第2位の山東省の2倍近くに達するものの、その生産量では山東省とそれほどの大差はなかった。

(3) 高粱・粟

華北の一般民衆における主要な食糧穀物となっていたのは、相対的に高価な小麦よりもむしろ雑穀に分類される相対的に安価な高粱や粟だったが、貧困層にとっては高粱や粟さえも高級な食糧となっていた¹⁰⁾。

まず、表4-1を見てみると、1914~37年において高粱の栽培面積が最も広がったのは山東省であり、これに河北省と河南省がついており、小麦の栽培面積では下位にあった山西省でさえも華中の諸省を上回っていた。

表4-1. 主要各省における高粱の栽培面積の動向 (単位: 万市畝)

年度	華北				華中		
	河北省	山東省	山西省	河南省	四川省	安徽省	江蘇省
1914	1,685	2,835	526	765	52	210	503
1915	1,768	2,082	237	765	511	437	470
1916	1,094	2,015	570	747	354	307	569
1918	1,651	1,886	1,402	12,249?	363	309	568
1924~29	1,997	2,050	904	1,423	427	465	621
1931	1,324	2,133	789	1,348	447	400	521
1932	1,392	1,856	881	1,340	480	491	475
1933	1,365	1,785	710	1,314	483	413	540
1934	1,387	1,763	705	1,356	567	399	579
1935	1,157	1,601	604	1,175	457	412	582
1936	1,245	1,670	564	1,234	448	481	564
1937	1,262	1,760	627	1,413	492	471	561

典拠) 表1-1に同じ。

表4-2. 主要各省における高粱の生産量の動向 (単位: 万市担, 市斤)

年度	華北				華中		
	河北省	山東省	山西省	河南省	四川省	安徽省	江蘇省
1914	1,560 (93)	7,340 (239)	456 (80)	900 (109)	61 (109)	326 (143)	624 (114)
1915	1,541 (87)	5,241 (225)	286 (111)	643 (78)	—	193 (41)	1,684 (328)
1916	1,874 (171)	2,230 (102)	1,293 (195)	414 (51)	—	461 (138)	801 (130)
1918	1,527 (92)	2,696 (127)	2,193 (144)	28,829? (217?)	—	416 (124)	902 (164)
1924~29	3,043 (152)	4,344 (212)	1,483 (164)	2,347 (165)	975 (191)	820 (176)	1,090 (176)
1931	2,105 (159)	4,459 (209)	907 (115)	1,875 (139)	961 (271)	429 (107)	709 (136)
1932	2,325 (167)	4,159 (224)	1,304 (148)	2,306 (172)	1,129 (311)	742 (151)	827 (174)
1933	2,020 (148)	3,677 (206)	931 (131)	2,326 (177)	1,124 (263)	847 (205)	1,031 (191)
1934	1,845 (133)	3,473 (197)	951 (135)	2,374 (175)	1,247 (279)	603 (151)	1,059 (183)
1935	1,732 (150)	3,486 (218)	794 (131)	2,302 (196)	1,338 (278)	772 (187)	1,357 (233)
1936	2,427 (196)	4,251 (255)	825 (146)	2,250 (183)	1,117 (231)	1,074 (223)	1,374 (249)
1937	1,585 (126)	3,539 (201)	913 (146)	2,527 (179)	1,461 (258)	871 (185)	1,228 (219)

典拠) 表1-1に同じ。カッコ内は1市畝当たりの生産量。

また、表4-2を見てみると、1914~37年において高粱の生産量が最も多かったのは山東省であり、これに河南省と河北省さらに山西省がついでいたが、1930年代には四川省と江蘇省が山西省より多くなっていた。ただし、1市畝当たりの生産量では四川省が最も多く、これに山東省がつぎ、さらに、江蘇省や安徽省がついでいた。

以上のことから、高粱については、華北がその中心的かつ主要な生産地であり、小麦よりもむしろ高粱こそが華北を代表する穀物だったと言える。ただし、華北の中において高粱の栽培面積と生産量が最も多かったのは山東省

であり、逆に、最も少なかったのは山西省だった。このように、高粱についても、華中の四川・安徽・江蘇の3省の生産量は華北の河北省と肩を並べており、また、山西省を上回っていた。

次に、表5-1を見てみると、1918~37年において粟の栽培面積が最も広がったのは河北省であり、また、これに山東省と河南省がつぎ、さらに、これに山西省がついでいた。いずれにせよ、生産量では華北が他地域を凌駕していた。

表5-1. 主要各省における粟の栽培面積の動向 (単位: 万市畝)

年度	華北				華中	
	河北省	山東省	山西省	河南省	湖北省	江蘇省
1918	1,277	719	3,693	8,742	102	204
1924~29	2,243	1,950	1,699	1,772	209	145
1931	1,790	1,635	1,263	1,525	190	112
1932	1,844	1,624	1,241	1,566	197	122
1933	1,808	1,766	1,149	1,588	195	163
1934	1,823	1,721	1,146	1,581	201	174
1935	1,795	1,519	1,009	1,730	168	157
1936	1,777	1,599	1,128	1,340	230	120
1937	1,789	1,576	1,220	1,538	220	128

典拠) 表1-1に同じ。

表5-2. 主要各省における粟の生産量の動向 (単位: 万市担, 市斤)

年度	華北				華中	
	河北省	山東省	山西省	河南省	湖北省	江蘇省
1918	1,178 (92)	1,451 (186)	6,643 (166)	16,166 (171)	211※ (191※)	363 (164)
1924~29	3,947 (176)	4,492 (230)	2,511 (148)	2,789 (157)	526 (251)	392 (270)
1931	3,258 (182)	3,761 (230)	1,542 (122)	2,196 (144)	146 (77)	—
1932	3,210 (174)	3,672 (226)	1,675 (135)	2,302 (147)	304 (154)	—
1933	2,803 (155)	3,726 (211)	1,551 (135)	2,335 (147)	342 (175)	236 (145)
1934	3,081 (169)	3,889 (226)	1,593 (139)	2,736 (173)	276 (137)	268 (154)
1935	3,009 (168)	3,563 (235)	1,366 (135)	2,937 (170)	263 (156)	345 (219)
1936	3,617 (203)	3,964 (247)	1,548 (137)	1,641 (123)	381 (166)	277 (231)
1937	2,464 (138)	3,205 (203)	1,508 (124)	2,099 (136)	263 (119)	278 (217)

典拠) 表1-1に同じ。なお、カッコ内は1市畝当たりの生産量を表している。

また、表5-2を見てみると、1918~37年における粟の生産量では山東省が最も多く、また、これに河北省と河南省がつぎ、さらに、これに山東省の半分以上にしかすぎない山西省がついでおり、やはり華北が圧倒的な地位を占めていた。ただし、1市畝当たりの生産量では山東省について江蘇省が多

く、これに河北省や河南省と並んで湖北省がついでおり、華北と華中がほぼ拮抗していた。

以上のことから、粟についても、高粱と同様に、華北がその中心的かつ主要な生産地であり、また、華北を代表する穀物だったと言える。しかも、華北の中で生産量が最も多かったのは山東省であり、逆に、最も少なかったのは山西省だった。また、華北4省のうち、栽培面積で粟が高粱を上回った省は山西省と河南省だったが、生産量では山東省を除く3省で粟が高粱を上回っていた。

以上の華北4省のうち、栽培面積で高粱が粟を上回っているのは沿海部の河北省・山東省と江蘇省であり、逆に、内陸部の山西省と河南省は粟が高粱を上回っている。また、生産量では高粱が粟を上回っているのは山東省と江蘇省であり、逆に、粟が高粱を上回っているのは河北省と山西省であり、河南省はその両者が拮抗している。さらに、1市畝当たりの生産量では高粱が粟を上回っているのは河南省と江蘇省であり、逆に、粟が高粱を上回っているのは河北省と山東省であり、山西省は両者が拮抗している。

(4) 玉蜀黍

相対的に高価な小麦を主食とすることができなかった華北の一般民衆にとって、玉蜀黍は小麦よりも安価な高粱や粟よりもさらに一層安価だったので、主食とされることが多かった。

まず、表6-1を見てみると、1918~37年において玉蜀黍の栽培面積が最も広がったのは河北省であり、これに四川省がつぎ、さらに、河南省と山東省がついでいるが、山西省は河南省の6割程度にしかすぎない江蘇省よりもさらに下位にあった。

また、表6-2を見てみると、1918~37年において玉蜀黍の生産量が最も多かったのは四川省であり、これに河北省がつぎ、さらに、河南省と山東省や江蘇省がついでおり、やはり山西省はさらにその下位にある。そして、1市畝当たりの生産量では、四川省が最も高く、これに江蘇省や湖北省がつぎ、さらに、山東省や河北省がついでいた。

表6-1. 主要各省における玉蜀黍の栽培面積の動向 (単位: 万市畝)

年度	華北				華中			華南
	河北省	山東省	山西省	河南省	四川省	湖北省	江蘇省	広西省
1914	747	305	174	48	823	230	222	50
1915	904	223	143	50	—	292	240	308
1916	941	289	179	308	—	272	244	379
1918	795	28	141	1,971	—	127	411	—
1924~29	1,429	551	374	795	1,175	602	362	—
1931	1,282	954	418	942	1,054	120	598	—
1932	1,295	1,098	411	1,042	1,082	131	627	—
1933	1,349	795	395	906	941	122	580	—
1934	1,373	754	392	910	918	113	530	—
1935	1,673	951	383	1,057	975	115	567	—
1936	1,572	820	396	976	995	192	605	—
1937	1,441	753	404	976	1,182	191	659	—

典拠) 表1-1に同じ。

表6-2. 主要各省における玉蜀黍の生産量の動向 (単位: 万市担, 市斤)

年度	華北				華中			華南
	河北省	山東省	山西省	河南省	四川省	湖北省	江蘇省	広西省
1914	757 (101)	467 (141)	212 (112)	32 (62)	1,107 (124)	479 (192)	399 (165)	153 (280)
1915	775 (86)	202 (81)	174 (112)	34 (62)	—	641 (203)	359 (138)	473 (141)
1916	929 (99)	331 (105)	304 (157)	168 (50)	—	521 (177)	363 (137)	689 (168)
1918	751 (94)	47 (155)	190 (124)	4,309 (202)	—	330※ (239※)	717 (161)	—
1924~29	2,448 (171)	935 (170)	719 (192)	1,179 (148)	2,649 (225)	1,655 (275)	656 (181)	—
1931	2,282 (178)	1,852 (194)	490 (117)	1,121 (119)	3,003 (285)	83 (69)	1,328 (222)	—
1932	2,345 (181)	2,064 (188)	591 (144)	1,428 (137)	3,398 (314)	161 (123)	1,587 (253)	—
1933	2,186 (162)	1,360 (171)	569 (144)	1,214 (134)	2,569 (273)	207 (169)	999 (172)	—
1934	2,197 (160)	1,396 (185)	592 (151)	1,447 (159)	2,471 (269)	210 (186)	881 (166)	—
1935	2,821 (169)	1,903 (200)	589 (154)	1,588 (150)	2,700 (277)	208 (180)	1,419 (250)	—
1936	2,756 (175)	1,483 (181)	593 (150)	908 (93)	2,022 (203)	449 (234)	1,365 (225)	—
1937	1,951 (135)	1,147 (158)	521 (129)	1,360 (139)	3,171 (268)	258 (135)	1,491 (226)	—

典拠) 表1-1に同じ。なお、カッコ内は1市畝当たりの生産量を表している。

以上のことから、玉蜀黍については、栽培面積において華北と華中はほぼ拮抗していたが、生産量と1市畝当たりの生産量では華中とりわけ四川省が華北を凌駕していた。

(5) 甘薯

甘薯は、単位面積当たりの生産量が穀物に比して多かったことから、一般的には貧困層の主食となっていた。

まず、表7-1を見てみると、1924~37年において甘薯の栽培面積が最も

広がったのは四川省であり、また、これにその3分の2程度の河南省と四川省の半分程度の山東省や広東省がつぎ、さらに、これに四川省のほぼ半分以下の江蘇省や河北省がついでいた。

表7-1. 主要各省における甘薯の栽培面積の動向 (単位: 万市畝)

年度	華南		華中					華北		
	福建省	広東省	四川省	湖南省	江西省	浙江省	江蘇省	河北省	山東省	河南省
1924~29	139	178	549	208	135	86	320	100	189	201
1931	146	354	582	193	104	140	264	264	312	388
1932	155	355	533	211	105	136	303	274	285	369
1933	192	369	701	230	130	138	275	256	339	462
1934	167	364	606	251	98	126	251	254	339	425
1935	173	346	600	255	141	140	274	252	356	443
1936	183	327	656	267	194	142	267	241	379	466
1937	182	340	955	205	190	153	216	245	374	460

典拠) 表1-1に同じ。

また、表7-2を見てみると、1924~37年において甘薯の生産量が最も多かったのは四川省と山東省や河南省であり、これに江蘇省と広東省がついでいた。

さらに、表7-3を見てみると、甘薯の1市畝当たりの生産量が他の農産物に比してはるかに高いことを窺い知ることができるが、そのうち最も多かったのは江蘇省と山東省であり、これにそれよりやや下回る福建省や河北省がついでいた。

表7-2. 主要各省における甘薯の生産量の動向 (単位: 万市担)

年度	華南		華中					華北		
	福建省	広東省	四川省	湖南省	江西省	浙江省	江蘇省	河北省	山東省	河南省
1924~29	1,941	2,074	7,151	2,286	1,217	1,522	4,372	1,560	2,439	2,822
1931	1,992	3,941	5,021	1,897	991	1,614	3,446	3,363	4,308	3,034
1932	2,178	4,106	4,773	2,518	1,098	1,680	5,013	3,885	4,091	3,677
1933	2,050	3,884	4,477	2,290	1,275	1,549	4,044	2,665	5,060	6,241
1934	2,027	4,052	4,611	1,732	491	829	2,705	3,050	4,617	5,363
1935	2,409	3,993	4,143	3,247	1,581	2,058	4,290	2,892	4,503	5,139
1936	2,076	3,445	4,604	2,710	1,763	1,304	3,834	2,915	4,972	3,330
1937	2,949	4,193	8,527	2,505	2,116	2,282	3,874	2,618	4,180	5,227

典拠) 表1-1に同じ。

表 7-3. 主要各省における甘薯の 1 市畝当たりの生産量の動向 (単位: 市斤)

年度	華南			華中				華北		
	福建省	広東省	四川省	湖南省	江西省	浙江省	江蘇省	河北省	山東省	河南省
1924~29	1,392	1,161	1,301	1,096	896	1,751	1,366	1,546	1,286	1,430
1931	1,365	1,111	862	980	947	1,146	1,301	1,271	1,379	782
1932	1,400	1,156	895	1,192	1,044	1,235	1,652	1,414	1,434	995
1933	1,068	1,051	638	993	974	1,116	1,466	1,038	1,490	1,351
1934	1,208	1,111	761	688	501	655	1,074	1,199	1,363	1,262
1935	1,392	1,154	689	1,272	1,110	1,471	1,566	1,145	1,264	1,158
1936	1,133	1,053	702	1,013	907	930	1,432	1,208	1,311	714
1937	1,614	1,233	893	1,222	1,112	1,483	1,786	1,066	1,116	1,134

典拠) 表 1-1 に同じ。

以上のことから、甘薯については、栽培面積と生産量では四川省が首位を占め、これに華北の河北省・山東省、華中の江蘇省、華南の広東省がついており、また、1 市畝当たりの生産量では華中の江蘇省と華北の山東省が首位を占め、これに華南の福建省や華北の河北省がついており、甘薯の生産では華北・華中・華南はほぼ拮抗していたといえることができる。

Ⅲ 主要農産物の流動

農産物は、農村では自給自足(地産地消)が原則であると考えられがちであるが、中華民国期中国では米をはじめとして大量の農産物が商品として生産され、あるいは、様々な農産物加工品も生産・販売されていた¹¹⁾。そこで、以下において、米・小麦をはじめとする様々な農産物及びその加工品の流動について簡単に見ておきたい。

(1) 米

まず、中国全国における米の流通について、中国海関貿易統計を利用しながら概観しておきたい。

表 8-1 を見てみると、1914~37 年における中国の米の輸出量は、1919 年には 120 万担を超えたが¹²⁾、それ以外に 10 万担を超えた年は 1920 年・1933 年・1936 年・1937 年の 4 年にすぎず、比較的少量にとどまっていた。これに対して、1912~37 年における中国国内の米の出廻量(移出量)は、海関貿易統計に

表れたものだけを見ても、最も少なかった1932年でさえも180万担余り、逆に、最も多かった1919年には1,200万担余りにも達していた。なお、その移出地としては、安徽省蕪湖が圧倒的に多く、これに江西省九江、湖北省漢口、湖南省長沙・岳州(岳陽)、上海が続き、ほぼ長江中流域に集中しており、海関貿易統計から見ると、米の移出における長江下流域の江蘇省が占める割合は相対的に低かった。

表8-1. 米の移輸出量 (単位: 万担, 1934年から万公担)

年度	輸出量	移輸出 量合計	主要移出地						
			天津	長沙	岳州	漢口	九江	蕪湖	上海
1912	3.7	641.5	0	102.3	55.7	0.6	2.7	456.2	17.8
1913	8.4	375.7	0.1	31.4	84.9	0	0	247.3	6.1
1914	2.7	312.8	0	60.0	6.4	0	0	227.1	14.5
1915	2.2	316.1	0	10.7	3.2	0	5.9	265.7	26.5
1916	2.2	469.6	0.2	18.6	7.3	46.7	36.6	335.0	21.1
1917	3.7	411.4	0	49.1	3.1	109.2	63.0	166.4	14.0
1918	3.3	387.8	2.6	0	0	2.8	46.3	319.0	12.1
1919	122.7	1,241.3	90.0	11.1	0	1.8	142.3	388.8	62.0
1920	31.1	947.6	3.9	227.9	6.3	5.1	210.1	471.5	14.5
1921	3.4	337.4	0	68.5	4.6	8.3	16.2	224.8	10.3
1922	4.5	211.2	0	61.5	7.5	8.0	26.3	82.9	10.3
1923	6.3	367.7	0	106.5	0	3.7	124.7	113.8	11.4
1924	4.1	798.4	0	231.1	0.3	5.2	244.7	298.5	9.7
1925	3.5	774.7	0	60.0	0	5.0	68.0	617.8	9.8
1926	2.9	204.7	0	2.8	0	7.0	6.7	157.7	9.1
1927	8.6	234.5	0	70.5	0	0.5	39.4	87.8	14.1
1928	2.9	602.7	3.0	167.2	1.1	0.5	139.6	248.3	29.5
1929	2.8	389.3	6.6	15.6	0	0	109.9	240.1	10.3
1930	2.7	245.5	4.9	15.8	0.1	0	34.4	169.8	12.6
1931	3.0	302.9	6.0	4.8	0	0	29.7	242.6	13.2
1932	3.6	182.5	0	17.6	0.1	1.5	12.8	130.4	11.6
1933	10.3	803.1	0	61.3	0.4	31.8	53.0	349.1	273.6
1934	6.8	440.3	0.5	65.9	0.2	41.3	4.4	121.8	147.2
1935	6.5	381.6	0	22.3	0.1	10.6	32.3	85.9	157.9
1936	26.8	723.2	0	81.0	0.5	42.0	183.7	161.9	177.1
1937	21.4	834.4	0.1	105.6	2.5	71.4	222.8	130.8	249.7

典拠) 中国第二歴史档案馆・中国海関総署辦公庁『中国旧海関史料(1859-1946)』(京華出版社, 2001年)より作成。ただし、移輸出量合計は1933年から移出量のみ合計であり、また、「0」は1,000担ないし1,000公担未満であることを示している。

一方、表8-2を見てみると、1912~37年における米の輸入量は、1,000万担を超えていたのは1916年・1921~33年で(このうち、1923年・1927年・1932年・1933年は2,000万担を超えていた)、移入量が輸入量を大きく超えていた

中華民國前期中国における農産物生産の概要 (弁納)

表8-2. 米の移輸入量 (単位: 万担, 1934年から万公担)

年度	輸入量	移入量 合計	主要移入地										
			天津	寧波	福州	廈門	汕頭	広州	九龍	上海	拱北	江門	三水
1912	270	270.0	2.5	0	0	34.5	16.5	5.7	134.9	0	37.4	3.7	0
1913	541	541.1	30.8	1.6	15.5	39.9	9.9	36.6	280.5	0	38.2	19.3	0
1914	681	682.9	39.0	0.3	1.3	25.4	4.6	15.7	430.3	0	78.1	9.1	0.3
1915	847	848.5	22.8	14.0	0	42.7	39.1	40.1	475.9	0.4	113.4	11.3	8.2
1916	1,128	1,128.9	17.2	0	0.2	61.6	30.6	84.8	541.1	0	153.0	91.3	37.2
1917	983	413.2	89.4	16.3	12.2	13.3	174.4	28.8	0	2.1	0	0	0
1918	698	360.0	25.3	12.0	3.8	4.5	210.0	1.1	0	0	0	0	0
1919	180	1,063.9	57.4	2.1	0	30.2	259.7	636.7	0	7.9	0	0	0
1920	115	115.2	6.3	0	0	5.8	0.6	7.5	50.5	1.7	6.6	11.0	0.1
1921	1,062	1,063.9	59.2	7.3	35.3	50.0	143.1	39.1	528.0	3.2	70.5	27.9	0.8
1922	1,915	1,942.1	111.6	92.7	1.2	69.5	207.3	316.4	555.7	163.4	112.4	69.8	61.9
1923	2,243	2,244.7	106.0	100.9	17.7	63.9	283.0	745.0	230.4	131.3	154.7	151.8	105.4
1924	1,319	1,319.4	44.3	0.3	0.7	59.2	123.5	274.0	373.2	1.7	168.9	109.0	95.9
1925	1,263	1,263.9	117.4	17.6	16.0	85.0	73.6	292.9	253.2	15.3	109.0	51.5	32.7
1926	1,870	214.5	3.4	3.7	1.0	0	3.6	3.7	0	26.2	0	0	0
1927	2,109	202.3	27.1	32.3	7.3	3.3	49.8	4.4	0	33.9	0	0	0
1928	1,265	619.9	89.0	109.7	2.9	6.4	138.8	68.4	0	110.1	0	0	0
1929	1,082	387.6	67.2	39.2	0.6	0	76.1	37.1	0	46.7	0	0	0
1930	1,989	198.5	42.7	6.8	3.7	3.9	50.4	19.7	0	22.5	0	0	0.1
1931	1,074	322.9	32.0	33.2	0.2	1.4	58.9	119.1	0	11.3	0	0	0
1932	2,138	150.6	15.8	0.9	2.7	0.1	28.4	49.4	0	14.8	0	0	0
1933	2,005	785.6	142.6	43.8	71.3	14.6	256.3	61.4	0	87.0	0	0	0
1934	648	418.0	51.8	23.1	33.6	10.5	99.0	7.4	0	134.9	0	0	0
1935	669	353.4	70.6	14.8	1.1	1.2	52.0	2.8	0	88.4	0	0	0
1936	186	701.5	118.4	7.9	2.5	10.7	131.4	93.0	0	221.2	0	0	0
1937	287	847.0	97.8	6.3	3.5	6.4	117.5	219.8	0	289.1	0	0	0

典拠) 表8-1に同じ。ただし、輸入量については、1万担未満ないし1万公担未満を全て切り捨てた。

のは1919年・1936年・1937年の3年にしかすぎなかった。また、1912～37年における米の移入地は、全国各地に普く広がっているが、移入量は広州・汕頭・拱北・三水などの広東省沿海部地域が圧倒的に多く、これに上海、天津、浙江省寧波、福建省福州・廈門、東北の大連が続き、中国東部の沿海部地域にやや集中していた。なお、すでに見たように、上海が必ずしも主要な産米地ではなかったにもかかわらず、米の主要な移出地の1つとなっていたのは、米の主要な移入地となっていたことによるということを改めて確認することができる。

ところで、1910年代の状況を示す資料によると、江蘇省では、蘇南のうるち米が「主トシテ粳米即チ丸粒米」だったのに対して、「江北一帯ヲ主トス」る地域のうるち米は「秈米ト称スル長粒米」を生産し、省全体で約100万石の余剰

米があったとされている。だが、浙江省産の米は「全人口ノ需要ニ応スル能ハス」、大量の安徽米を移入しており、また、湖北省漢口に集散する米は湖南米約100万石・四川米14万石・湖北米15万石の合計約129万石で、江西省は約100万石の余剰米を広東・福建・湖北の3省に移出し、四川省も「省内ノ産米ヲ以テ全人口ノ需要ニ応スル能ハサルモ同省ハ麦ノ産出多キヲ以テ住民ノ一部分ハ麦ヲ常食トシ外省ヨリ米ノ供給ヲ受クルコトナク寧ロ揚子江下流地方」などに米を移出していた。一方、華南の福建・広東・広西の3省は華中から安徽米や湖南米を移入するとともに、東南アジアからタイ米やサイゴン米をも輸入していた¹³⁾。

これに対して、1930年代の状況を示す資料によると、浙江省を除く華中各省における例年の移輸出米の数量は、江蘇省が300万石以上、安徽省が3700～1,000万石、江西省が500～600万石だったとされている¹⁴⁾。そして、1935年の調査によれば、浙江省の「需要米穀は全く無錫の供給に仰」ぎ、しかも、安徽米が「平均して無錫米穀取引の半ばを占めてる」という¹⁵⁾。すなわち、無錫米市にとって、安徽省は最大の仕出地であり、浙江省は最大の仕向地だった。なお、前近代において中国四大米市(米の集散市場)とされていた湖南省長沙・江西省九江・安徽省蕪湖・江蘇省無錫は、近代においても米の重要な集散市場となっていた。だが、華中の農村が大旱害に見舞われた1934年¹⁶⁾は、浙江省が米を移入しようにも、すでに述べてきたことから明らかなように、華中各省における米の生産量が激減したために(前掲の表2-1を参照)、それまで米の仕出地となっていた各省には米を移出する余力はなかったと言わざるをえない。

次に、うるち米の主要な生産地・消費地だった華東(華中の東部)地域に限定して、1930年代におけるうるち米の流通状況を見ておきたい。

まず、安徽省の蕪湖米は年間400～500万石の余剰があり、「無錫を中心とする江蘇省産米地帯及上海周辺の蘇州松江一帯からは又400-500万石の余剰米を出し」、「一方消費地の主たるものは上海、南京等の都市であって上海は1ヶ年600万石を消費し」、浙江省は「米不足の地で殊に酒の醸造と相俟つて杭州、寧波、紹興等へは年々200万石以上の移入が行はれた」という¹⁷⁾。

また、「蕪湖市場の背後地」としては、安徽省内の太湖・懷寧・桐城・蕪湖・

当塗・南陵・無為・廬江・巢県・合肥・舒城・含山・和県・貴池・宣城・郎溪・広徳・休寧があり、「就中合肥県の三河、舒城県の桃鎮は毎年100万石以上の余剰米を有し首位を占め、更に合肥県上派河を中心とする背後地よりの集貨は年80万石に達した。その他各県よりの移輸出は総計約700—800万に達したと推定される。然も之等米穀生産余剰の移輸出が悉く蕪湖市場に集中的であった。出廻数量の約70%が江北地帯各県よりのもので、残りの30%が江南背後地よりの出廻で」、また、同じく安徽省の「蚌埠の背後地」は正陽関・寿県・鳳台・潁州・潁上・霍邱・太和・蒙城・渦陽・懷遠・臨淮関・五河・盱眙の「淮河本支流一帯の地にして更に洪沢湖を通じて長江に出て南京、上海方面との連絡もあり、実に淮河貿易の中心をなして居」た¹⁸⁾。

一方、江蘇省鎮江に出廻る米は主に江北の高郵・宝応・興化・寿州・東台・泥水・甘泉・江都産のものが大部分を占め、これらは「一旦揚州に集荷され同地より大運河により瓜州經由にて」鎮江に出廻り、「江南地帯の背後地」は丹陽・常州・句容で、鎮江への米の出廻量は約13万トで、鎮江での消費は約2.6万トだった。また、無錫への米の出廻は江南の金壇・溧陽・蕪湖・当塗・宜興・常熟と江北の泰州・泰興・東台・興化・如皋からのものが大部分を占め、「米の年間集散量は、無錫県産のものを除き大約44—45万飴と称せられ、その中60%見当は蕪湖並に当塗方面産のものによつて占められ」、「残りの40%は無錫近隣の常熟方面産のものが大部分を占め、江北産は10%内外に過ぎない。無錫県内の産額は10万飴見当なるも、消費が13万飴にして差引3万飴の供給不足となつ」た¹⁹⁾。さらに、呉県は「所謂粳米を産し年約160万石の産量がある。然し之は殆ど県下及蘇州で消費され他県に出廻るものは少」なかつたが、常熟米は「上海市場で好評がある為価格も高いので呉県米が常熟に入り常熟米となつて上海に向ふこともあ」り、また、江南の産米地は上海を中心(集散地)とする常熟・太倉・昆山・松江・青浦・金山と無錫を中心とする句容・溧陽・金壇・宜興・武進・江陰とに2分されており、「更に蘇北一帯も無錫に集り」、「蕪湖米の浙江、江蘇省に搬出せらるゝものの定着地点で」、集散する米の半分以上は蕪湖米だった。しかも、長江を挟んで鎮江の対岸に位置する揚州には「蘇北の産米地からは地場消費を差引き少くとも50万石の出廻可能量」があつた²⁰⁾。

そして、浙江省杭州市湖墅に出廻る米の産地は江蘇・安徽の2省と浙江省湖州・嘉興で、その数量は「年約11万匁に達し付近産のもの及び外米は少なかった。此の内約85,000匁は杭州に於て消費され、残余の中約16,000匁は拱震橋より錢塘江を越へ義橋、聞家堰、臨浦、新壩を通り内河により紹興堰橋に輸送され、其他は浙江省内各地に輸送されて居た」²¹⁾という。

以上のことから、中華民国前期中国では大量の米が国内を流動しており、華中が中心的な米の生産地だったが、大量の余剰米を移出していたのは湖南省・江西省・安徽省の長江中流域(華中の中部)で、それらの米は江蘇省を経由して、主要な米の生産地でありながら米不足に陥っていた浙江省や大消費地の上海へ移出されていたことがわかった。そして、米の生産量が首位にあった四川省は、意外にも省内の需要を充たすことができなかったが、その不足分を米よりも安価な麦によって代替し、逆に、米を移出していた。このような状況は、同じく主要な米の生産地でありながら米不足に陥っていた浙江省が大量の米を移入していたのとは対照的であり、このような両省の差異は明らかに農村経済の発展水準を反映したものであると考えることができる。また、四川省とともに米の生産量が首位にあった広東省は、浙江省と同じように、不足する米を移入していたが、浙江省と異なるのは東南アジアから大量の米を輸入していた点である。広東省における米の移入量と輸入量は、輸送コストが上乗せされた広東省での米の販売価格に応じて変動していたと考えられるが、いずれにせよ、広東省の状況も、四川省との比較から言えば、浙江省と同様に、やはり農村経済の発展水準を反映したものと考えることができる。

(2) 小麦

表9を見てみると、1912～37年における小麦の輸出量は、1920年をピークとして1922年までとその後の1928年に100万担を超えていたが、それ以外は麦粉を加えても減少していたことがわかる。これに対して、小麦の移出量(国内における出廻量)は、平均すると、輸出量の10～20倍以上となっている。そして、その移入地についてはいくつかの変化が見られる。すなわち、主な移入地のうち、哈爾濱では移入量が1922年からほぼ途絶しており、また、上海で

は1918年をピークとして1915～20年・1925年・1930年には100万担を超えていたが、1823年・1930年・1931年には激減するなど、変動が極めて激しかった。一方、主な移出地(仕出地)のうち、哈爾濱や大連では1920年代の数年を除くと、移入量は少なく、また、膠州では1919年の前後3年間を除くと、ほぼ途絶しており、さらに、漢口では1918年をピークとして1916～20年には100万担を超えていたが、1914年・1923年・1931～33年には激減するなど、変動が極めて激しかった。

以上のことから、中華民国前期の中国国内における小麦の流動量は、変化が非常に激しく、また、米のそれよりも少なかったものの、小麦もかなりの部分が商品として流動していたことがわかる。

表9. 小麦の移輸出量 (単位: 万担, 1934年から万公担)

年度	輸出量	移出 総量	主要移入地			主要移出地(仕出地)						
			哈爾濱	天津	上海	哈爾濱	大連	膠州	漢口	蕪湖	鎮江	上海
1912	137	212.7	46.4	3.3	49.3	14.7	1.1	0	40.7	0.3	1.1	5.3
1913	184	219.6	160.2	0.7	29.2	14.0	0.8	0	20.6	5.7	1.5	2.0
1914	196	248.6	40.7	0	37.6	23.9	3.0	0	2.2	2.3	0.3	1.1
1915	151	309.1	66.2	0	127.2	5.4	9.1	0.3	25.2	0.7	0	2.0
1916	116	293.0	55.8	0.9	174.8	0.7	8.5	0.5	151.4	0.3	0	0.1
1917	155	415.0	74.4	4.4	227.8	0.7	17.8	0	197.7	11.4	0	0.4
1918	181	487.4	170.1	0	275.6	0.6	43.7	36.8	234.3	10.1	1.6	0
1919	445	699.5	121.7	0.1	237.0	0	74.3	106.4	181.1	6.2	18.0	1.7
1920	843	1,168.4	426.3	57.5	149.8	0	663.9	12.0	105.6	10.9	38.3	5.4
1921	519	670.2	160.3	3.1	77.7	209.0	344.7	4.2	30.5	6.5	19.2	0.7
1922	115	169.5	0	5.0	41.2	104.6	14.8	0	34.7	0.3	0.6	0.3
1923	63	81.4	5.6	0.5	7.9	55.9	5.5	0	2.7	3.0	0	0
1924	14	171.5	0	43.3	98.2	11.3	1.6	0	95.2	10.5	16.9	22.2
1925	20	192.5	0	38.9	156.2	19.9	0	0	87.9	23.0	16.1	19.6
1926	0.4	61.2	0	1.0	50.5	0.6	0	0	18.0	10.5	3.4	1.0
1927	49	163.6	3.2	8.7	97.8	36.6	17.8	0	70.8	18.9	1.3	0
1928	180	324.2	1.7	102.2	34.4	92.1	90.3	0	57.5	43.6	4.4	11.3
1929	80	188.0	0	32.5	61.7	26.6	48.8	0	28.3	48.9	1.6	3.2
1930	1	107.8	0.5	0.1	104.2	1.2	1.5	0	52.4	7.2	4.6	0.2
1931	0.7	67.2	0.3	13.2	7.7	0	0.5	0	4.9	0.3	6.6	52.9
1932	41	33.2	膠州	0.2	5.4	41.6	南京	0	0.8	0.2	4.6	26.0
1933	3	83.9	0	8.3	31.9	寧波	8.8	0	2.5	15.0	16.8	35.4
1934	13(6)	82.2	0	19.0	59.4	0.3	13.9	0	11.4	15.2	40.4	0.4
1935	9(0.3)	70.4	0	22.2	34.2	0	4.9	0	32.6	4.6	20.9	7.0
1936	31(9)	134.9	11.5	31.5	84.5	0.5	11.4	0	61.5	24.9	32.3	1.7
1937	7(1)	135.9	19.5	25.5	71.2	3.8	16.4	0	24.9	48.1	25.6	5.3

典拠) 表8-1に同じ。ただし、表中の輸出量のうち、カッコ内は麦粉の輸出量を示している。

ついで、1920年代初めに刊行された資料から、米・小麦を含む主要な農作物とその加工品の流動状況について山東省・安徽省・江蘇省(主に蘇北)を例として見てみると、米5,000ト^ンが安徽省の蚌埠から山東省の済寧へ移出され、江蘇省の徐州から山東省の済寧への移出品は主に雑穀や小麦で、徐州から移出された小麦10万ト^ンは蘇北の銅山・蕭・沛、溧・碭山・睢寧と鳳陽をはじめとする安徽省から集まってきたものであり、その移出先は「天津済寧行8分ニシテ鎮江無錫行2分」だった。一方、徐州へは蚌埠から雑穀、また、徐州と安徽省の明光・蚌埠からは米2,000ト^ンが移出された²²⁾。

そして、同じく1920年代初めに刊行された資料から、蘇北の大運河沿岸地域を中心に据えて見てみると、清江浦に移入される雑穀約1万ト^ンのうち、小麦は蚌埠から移入され、また、清江浦では鎮江からの移入米を山東省の台兒庄へ移出していた。漣水からは、主に大豆粕・小麦・大豆・胡麻・落花生油などを移出し、落花生油10万担が新浦と江南の常州・鎮江へ半分ずつ、大麦30万担と小麦50～60万担が新浦・清江浦へ、大豆20万担(漣水の1石=板浦の3斗)が新浦・常州へ、大豆粕20万担が益林を経由して鎮江・新浦へ、豆油20万担が江蘇省の通州・常州へ(その他、湯溝地方産は新浦へ、また、高溝一帯産30万担は漣水を通過して益林に約7割、蘇北の塩城に約3割)移出し、逆に、米5万石を鎮江(約3万石)・常州・通州から移入した。蘇北の海州(東海県)の移出量は、大豆粕91.4万担・小麦粉26万担・大豆油10万担の他に、沭陽・楊集(「大部分ニ小麦作付アリ黄豆高粱之二次ク」)・高溝・大伊山(農産品は小麦5分・大麦3分・雑穀2分で、大豆・緑豆はみな省外に移出)などに「散在スル搾油工場ノ製品ヲ計上スル」と、大豆粕247万担・大豆油25万担以上に及び、海州へは沭陽・東海・灌雲・漣水一帯と時には淮安・宿遷さらに安徽省からも農産物が移入されたという²³⁾。

さらに、「大運河及塩運河沿岸都邑」の「背後地ニ於ケル都邑」²⁴⁾として、睢寧とその付近の高作鎮・雙溝を取り上げている。すなわち、睢寧の主な移出品は胡麻約30票(1票=1万斤)・胡麻油30票・金針菜30票・落花生50票(「往事盛ナル時2,000票」)・瓜子30票・大豆40票(大豆と胡麻を「毎年輪作スルモノ多キ」故に、大豆の作付が少ない時は胡麻の作付が多かった)・豆粕約200票(「中餅」(15斤)は上海・広東へ移出)・小麦1.5万石(1石=160斤)・緑豆5,000

石、玉蜀黍5,000石で、高作鎮付近の移出品は大豆(広東へ)・落花生(広東や外国へ)・胡麻(華南へ)・小麦・高粱・「豆餅(小油坊附近部落ニ50戸アリ)」で、雙溝の主要な移出品は小麦1万票・胡麻300票・落花生300票・大豆1万票・香油(胡麻油は8斗で「10個豆粕ト20余斤ノ油ヲ得」、小豆は4斗で「10個豆粕ト23斤ノ油ヲ得」)50票などだった²⁵⁾。

以上のことから、米や小麦以外の農作物及びその加工品も大量に流動していたことがわかる。そして、それらは米や小麦の移入に対する見返り品として移入されていた部分が相当あったと見なすことができる。いずれにせよ、中国農村経済が基本的に自給自足的な自然経済の状況にあったのではなく、むしろ相当程度まで商品経済の中に組み込まれていたと見なすことが妥当であらう。

おわりに

中華民国前期中国における主要な農作物には、米や小麦の他に、高粱・粟・玉蜀黍などの雑穀や甘薯があった。うるち米の主要な生産地だった華中では、1930年代には生産量が増加しつつあり、小麦の生産量においても主要な生産地だった華北諸省と肩を並べるほどだった。しかも、華北を代表する穀物の高粱・粟・玉蜀黍の生産量についても、華中のいくつかの省は華北諸省と肩を並べるほどだった。さらに、甘薯の生産量では四川省が首位にあり、これに華北・華中の東部沿海部地域がついでいた。

一方、農産物の流動については、各地の移出量ないし移入量の変動は非常に激しかったが、農産物及びその加工品が大量かつ広範囲に流動しており、中華民国期中国における商品経済の発展水準の高さを窺い知ることができる。

注

- 1) 拙稿「抗日戦争前における浙江省の稲麦改良事業について」(広島史学研究会「史学研究」第214号、1996年10月)・同「20世紀前半における米生産をめぐる蘇北と蘇南の関係」(『東洋史研究』第63巻第4号、2005年3月)・同「中華民国前期中国における食糧事情の概略」(鹿児島国際大学附置地域総合研究所「地域総合研究」第34巻第1号、

- 2006年9月)・同「近代中国の農村経済と食糧事情」(山川出版社『歴史と地理－世界史の研究』第611号, 2008年2月)・同「なぜ食べるものがないのか－汪精衛政権下中国における食糧事情」(弁納オ－・鶴園裕編『東アジア共生の歴史的基礎－日本・中国・南北코리아の対話』御茶の水書房, 2008年)・同「日中戦争期山東省における食糧事情と農村経済構造の変容」(東洋文庫『東洋学報』第92巻第2号, 2010年9月)・同「中華民國前期山東省における食糧事情の構造的把握」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月)・同「山西省の農村経済構造と食糧事情－臨汾市近郊農村高河店の占める位置」(三谷孝編『中国内陸における農村変革と地域社会－山西省臨汾市近郊農村の変容』御茶の水書房, 2011年)。
- 2) ロッシング・バック編(岩田孝三訳)『支那土地利用地図集成』(東学社, 1938年)21～22頁。なお, 原典は, Buck John Lossing, “Land Utilization in China: a study of 16,786 farms in 168 localities, and 38,256 farm families in twenty-two provinces in China, 1929 - 1933”, University of Nanking, Sole agents in China, Commercial Press, 1937. であり, 同地図集は同上書全3巻のうちの第2巻(Vol.2)を邦訳したものである。
 - 3) 牧野文夫・羅歆鎮・馬徳斌「中華民國期の農業生産」(『中華民國期の経済統計: 評価と推計 中国部会・第2回国際ワークショップ報告論文集』一橋大学経済研究所, 2000年2月)。
 - 4) 曹幸穂「民国時期農業調査資料に関する評価と利用」・吉田滋一「牧野・羅・馬および曹論文へのコメント」(同上書『中華民國期の経済統計』)。
 - 5) 台湾総督府殖産局『支那ノ米需給状況』殖産局出版第104号(1915年)1頁・3頁。
 - 6) 唐雄傑著・秋山洋造訳「安徽, 江蘇, 浙江, 江西四省米穀運輸過程の検討」(『満鉄調査月報』第20巻第2号, 1940年2月)。なお, 原典は唐雄傑「皖蘇浙贛米穀運輸過程の検討」(『交通雑誌』第5巻第6～7期)であるという。
 - 7) 前掲拙稿「抗日戦争前における浙江省の稲麦改良事業について」。
 - 8) 詳細については, 拙稿「災害から見た近代中国の農業構造の特質－1934年における華中東部の大干害を例として」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究彙報』第19号, 1997年3月)を参照されたい。
 - 9) 詳細については, 拙著『近代中国農村経済史の研究－1930年代における農村経済の危機的状況と復興への胎動』金沢大学経済学部研究叢書12(金沢大学経済学部, 2003年3月)を参照されたい。
 - 10) 前掲拙稿「日中戦争期山東省における食糧事情と農村経済構造の変容」・同「中華民國前期山東省における食糧事情の構造的把握」104～108頁・同「山西省の農村経済構造と食糧事情－臨汾市近郊農村高河店の占める位置」57～64頁を参照されたい。
 - 11) 例えば, 緑豆の加工品である粉条(春雨)の生産については, 拙稿「近代山東省における粉条の生産から見た中国農村経済の特質」(『金沢大学経済学部論集』第28巻第1号, 2007年12月)を参照されたい。
 - 12) 1919年において米の輸出量が突出して高くなっているのは, 日本における米不足・

米騒動に起因する大量買付けの結果であろうか(野沢豊「米騒動と五四運動—東アジアにおける民族、国家の相互関連性をめぐって」『近きに在りて』(創刊号, 1981年8月)を参照されたい)。なお、天津からの米の移輸出量急増の原因と合わせて、今後の検討課題としたい。

- 13) 前掲書『支那ノ米需給状況』4～9頁。
- 14) 前掲論文「安徽、江蘇、浙江、江西四省米穀運輸過程の検討」212頁。
- 15) 社会経済調査所編『無錫米市調査』支那経済資料12(生活社, 1940年)2～17頁。
- 16) 注8)に同じ。
- 17) 「中支那に於ける米の流動経路」(大東亜省『調査月報』第1巻第9号, 1943年9月)3頁。
- 18) 「中支に於ける物資移動経路及数量に関する調査報告」(興亜院『調査月報』第2巻第6号, 1941年6月)126頁・132頁。
- 19) 同上論文, 141～143頁。
- 20) 前掲論文「中支に於ける米の流動経路」(『調査月報』第1巻第9号, 1943年9月)35頁・46頁・49頁・79頁。
- 21) 前掲論文「中支に於ける物資移動経路及数量に関する調査報告」158頁。
- 22) 青島守備軍民政部鉄道部『大運河及塩運河沿岸都邑経済事情』調査資料第27輯(1921年)88頁・104頁・110頁・114頁。
- 23) 同上書, 153～154頁・159～160頁・162頁・179頁。
- 24) 同上書, 184頁。
- 25) 同上書, 186～191頁・194～196頁。